

令和5年3月31日

完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 岡山県真庭市久世 2927 番地 2
管理機関（代表の機関）名 真庭市
代表者名 太田 昇

令和4年度マイスター・ハイスクール事業に係る完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和4年4月1日（契約締結日）～ 令和5年3月31日

2 管理機関

①管理機関（市区町村・都道府県）

ふりがな	まにわし
管理機関名	真庭市
代表者職名	市長
代表者職名	太田 昇

②管理機関（産業界）※2団体以上ある場合は、適宜、欄を追加して記入してください。

ふりがな	めいけんこうぎょうかぶしがいしゃ
管理機関名	銘建工業株式会社
代表者職名	代表取締役社長
代表者氏名	中島 浩一郎

③管理機関（学校設置者）

ふりがな	おかやまけんきょういくいいんかい
管理機関名	岡山県教育委員会
代表者職名	教育長
代表者職名	鍵本 芳明

3 指定校名

学校名 岡山県立真庭高等学校

学校長名 豊田 涼

4 事業名

自然・社会・人との対話で育む真庭型産業人材育成構想

－「環境（SDGs）」×「アグリビジネス」⇒豊かな生き方・働き方－

5 事業概要

- ・中山間地域において自然と共生しながら持続可能な地域産業と地域を担う人を育むため、産業と教育に知見を有する真庭市職員をマイスター・ハイスクール CEO、銘建工業社員を産業実務家教員として真庭高校に配置するとともに小中連携等に取り組む郷育魅力化コーディネーターの配置やコンソーシアムの構築により地域で高校教育を共創する。
- ・真庭高校において、真庭市の農産物を生産・加工・販売する6次産業化への学習を農商連携により展開するとともに、地域の農林業資源を活用した農業体験や観光プランの提案等を行うビジネスプランの作成に取り組む。地元関連企業と連携し、新商品の開発・提案を行うとともに、模擬会社スタイルの学習展開の中で起業家教育を推進する。

6 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設していない（検討中）
- ・教育課程の特例の活用 活用していない

7 意思決定機関の体制（マイスター・ハイスクール運営委員会）

氏名	所属・職
豊田 涼	岡山県立真庭高等学校・校長
中島 浩一郎	銘建工業株式会社・代表取締役社長
太田 昇	真庭市・市長
鍵本 芳明	岡山県教育委員会・教育長
大月 隆行	真庭商工会・会長
岡田 茂樹	晴れの国岡山農協・真庭統括本部常務理事
澁澤 壽一	NPO 法人共存の森ネットワーク・理事長
池永 京子	Maman 代表
中村 妃佐子	株式会社 HAPPY FARM plus R 取締役

8 事業推進機関の体制（マイスター・ハイスクール事業推進委員会）

氏名	所属・職
平田 勉	マイスター・ハイスクール CEO
豊田 涼	岡山県立真庭高等学校・校長
中島 洋	銘建工業株式会社・総務人事部長
道満 洋和	岡山県商工会青年部連合会・理事
三村 伸行	NPO 法人真庭めぐりガーデンプロジェクト・ゼネラルマネージャー
牧 邦憲	真庭市・産業政策課長
安藤 紀子	真庭市教育委員会・教育次長
室 貴由輝	岡山県教育庁・高校教育課高校魅力化推進室長
杉山 俊幸	岡山県立真庭高等学校久世校地・副校長
吉原 啓之	岡山県立真庭高等学校落合校地・副校長
大越 健太郎	銘建工業株式会社・小断面工場長（産業実務家教員）
吉野 奈保子	真庭市郷育魅力化コーディネーター
大岩 功	真庭市郷育魅力化コーディネーター
三村 公一	真庭支部中学校長会・会長

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①マイスター・ハイスクールビジョン					■8/29 第1回運営委員会			■11/2 第2回運営委員会				■2/20 第3回運営委員会
②地域を担う人材育成カリキュラム					■8/24 第1回事業推進委員会			■10/26 第2回事業推進委員会				■2/14 第3回事業推進委員会
③地域産業学習カリキュラム	産業実務家教員配置(臨免) (4/1~6/30)			産業実務家教員候補配置(特別免許) (7/1~3/31)								
⑥真庭市郷育魅力化コーディネーターとの連携	総合的な探究の時間の支援 市内探究ツアーのコーディネート、聞き書き実施、真庭トライ&リポート実施サポート											
⑦活動を支援する体制の構築	マイスターハイスクール合同会議開催 (6/29、7/28、8/29、9/30、10/31、1/19)											

(2) 実績の説明

(a)管理機関による人的支援

事業名にもある「自然・社会・人との対話で育む真庭型産業人材」を育成するため、木質バイオマス産業で先端を行く地元企業銘建工業株式会社が管理機関として参画。あわせて同社管理職社員を産業実務家教員として令和4年度より派遣している。

またもう一つの管理機関である岡山県教育委員会は、県下初となる産業実務家教員への特別免許の発行や本事業を遂行するための適切な助言を行うなど側面支援を行っている。

代表管理機関を務める真庭市は、本事業を通じた新たなカリキュラム編成を主導するマイスターハイスクールCEOを1名任用し高校に配置するとともに、地域と高校をつなぐ郷育魅力化コーディネーターを任用し、探究的な学習の時間のサポートや「聞き書き」の導入を行った。またあわせて今後の自走化を見据え、庁内プロジェクトチームによるアクションプランの策定及び実施により高校連携を全庁的取り組みに引き上げ、産業及び地域振興を中心に各担当課が直接関わる関係性を構築している。

(b)管理機関による財政支援

管理機関の代表である真庭市にとって、真庭高校は、地域産業の担い手として多くの産業人材を輩出してきたことから、同校の存続は持続可能な地域づくりを進める上で重要な課題と位置づけ市を挙げて財政支援することとしている。本事業は令和5年度で終了するが、本事業中に編成するカリキュラムがスタートする令和6年度以降においてもそれまで培ったノウハウを活かし続けるため、高校と連携して継続した財政支援を行っていく。令和4年度は3年度に引き続き五感を使って地域を学ぶため、聞き書きのスキームを取り入れた実習や、地域産業と連携する先進校視察のための財政措置を行った。

(c)地域で支える体制づくり

自走化に向け、本事業に参画する個人・団体を広げ、コンソーシアムを構築することを目標としているが、その前段として地域づくり団体の構成員でもある若手事業者らを交えた小規模な「合同会議」を月1回ペースで開催し、地域で支える体制を作っていくための検討を重ねてきた。

「行きたい高校」「学びたい環境」としていくことが地元進学率の向上はもとより地域で支える意味にもなってくることから、高校内部での取り組みと合わせ、令和4年度は実際に生徒が入り、動きが出てきた校内で取材を重ね、地元真庭市の「広報まにわ」での特集記事掲載や地元ケーブルテレビの番組で情報発信を行った。

10 事業の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (契約日～令和5年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①マイスター・ハイスクールビジョン				○				○				○
	○印 運営委員会		7月・11月進捗状況確認					評価・検証				
②地域を担う人材育成カリキュラム			◆					◆				◆
	◆印 事業推進委員会		交流学習・地域産業界連携協議									
③地域産業学習カリキュラム				★						★		
	SDGs講演会		研修調整		銘建工業バイオマス学習				検証・次年度計			
④地域資源を活用した学習カリキュラム												★
	真庭トライ&レポート実施			地域連携内容検討、連携実施						真庭トライ&レポート発表会		
										検証・次年度計画		
⑤学校設定教科・科目の研究			◆				◆					◆
	ニーズ調査		外部企業との連携・試行				◆事業推進委員会開催時に検討・調整					
⑥真庭市郷育魅力化コーディネーターとの連携活動			★									
	聞き書き講座		真庭トライ&レポート参画									
	植栽交流等の事業実施						次年度交流学習計画					
	保・幼・こども園、小・中学校連携調整											
⑦活動を支援する体制の構築												
	事業参画の個人・団体募集とコンソーシアムの構築											

(2) 実績の説明

令和4年度は、本事業で指定された「農：食農生産科」と「商：経営ビジネス科」が設置された。しかし、新設学科のため学習展開と地域連携の取組みが確立しておらず、新たに配置された専門教科の教員数も少数しかいないため学科運営に苦慮したが、CEO・産業実務家教員と専門教科教員を中心にマイスター・ハイスクールビジョンで示す地域産業学習に沿った取組みを検討・リストアップし、順次着手した。既存の学科においては、これまで培ってきた地域連携・地域貢献活動を継続して実施した。

I 農林業・商業のスキル獲得と地域産業と連携した学習

スマート農業学習による専門スキルの習得や地元企業と連携したキャリア教育としてインターンシップを行った。いろいろな機材や技術により行う近年の農業が、従来のスタイルの農業の難しい、苦しいものというこれまでの概念とは大きく違い、生徒の中では意識変化が出たと思われる。

II ビジネスプラン学習と学科間連携

○地域の特産品を使った商品開発と販売実習

地元企業とのコラボ商品の企画販売や市内で栽培された野菜や果物を使ったスイーツ等の販売を行った。こちらについては後日の意識調査により活動を通し80%以上程度の生徒が肯定的評価を行っており、自己肯定感の醸成に大きな効果が確認された。今後はより自身の進路・関心とリンクしていくよう、専門科目で学習する内容との関連性を意識させ指導していきたい。

○地域を活かした観光ビジネス学習

経営ビジネス科では、実体験を活かした学びにつなげるため、地域を知り、人と出会い会話することを目的として2回の「ビジネス探究ツアー」を実施した。

第1回は真庭市の北部である蒜山・中和・湯原の5か所を巡り暮らしや地域資源や自然を生かした生業について学ぶバスツアーを実施した。ここでは真庭に住んでいながら知らなかったこと、真庭に住んでいるからこそ気づけなかったことなど、新しい真庭の魅力や資源を知った感想が大多数を占め、また今後の経営ビジネス科の中でやってみたいことも具体化してきた。

また生徒にとって真庭は『ただの田舎・何もない田舎』であったが、今回の講話で自分たちの住む真庭に自信を持つ生徒が現れ、それに関連して「一度市外・県外に出て別の視点を獲得することの大切さ」を書く生徒が多くおり、自宅でも保護者にその話をした生徒もいて、進路学習としての側面もあらわれた良いツアーだったと思う。

2回目は真庭市の南部である落合・北房・勝山・久世で、歴史と景観を生かした暮らしや地域資源や自然を生かした生業について学ぶためにバスツアーを実施した。こちらは生徒の居住区域ということもあり、周辺に住む生徒が他地域の生徒に説明する姿が見られ好印象であった。一回目の北部ツアーに引き続き、生徒たちの振り返りの多くが内容に満足したというものだった。ここでは「真庭の活気」を感じる生徒が多く、その理由を若者が集まりそうなコンテンツと真庭市民の人的関係に見いだしていたようだ。またビジネス成功には経営知識だけではなく「熱意」や「笑顔」「楽しむこと」など自身の気持ちの持ちようも大切であることも学んだ。

○地域産業との連携による起業体験

真庭市産業政策課の提案により、一般的な就業体験の形式ではなく、「真庭市の企業と都心の企業が協働し現場に存在する様々な課題やそれに立ち向かう姿を見せる」という提案型インター

ンシップに参加。参加した生徒は柔軟な発想や必要とされる知識やコミュニケーション能力の重要性に気づき、6次産業化や商品開発、マーケティングなどへの学習意欲を高めた様子であった。

Ⅲ地域を愛する心の醸成と地域人材活用

この項目に該当する事業として地域をフィールドとした研修、地域ボランティアの参加について以下のテーマで事業を実施した。

- ①市内のハーブガーデンの散策と栽培されているハーブについての講話を聞き、またドライフラワーを用いたリース作りの実技講習を受けることでハーブや草花の活用について学ぶ
- ②牛セリ市を視察し肉用牛の流通形態や「せり市」の運営や仕組みについて学ぶ
- ③公共施設へのプランター配布により地域に対する理解と関心を深める
- ④ショッピングセンターの販売ボランティアによりビジネスマナー等を学ぶ
- ⑤地域振興イベントに参加し活動紹介することで地域理解とつながりを深める
- ⑥企業に出前講座を開いてもらい、地域のビジネスを取り巻く環境等について理解を深める

上記について①から⑤については生徒の自由記述と意識調査から成果検証を行ったところ、全体として自己肯定感の醸成に大きな効果があったと考える。いずれも主体的に活動することができたことから、今後はより自身の進路・関心とリンクしていくよう、専門科目で学習する内容との関連性を意識させ指導していきたい。

⑥の出前講座では、真庭の地域経済を支える各事業所からの講座によって教科書だけでは学ぶことのできない地域のビジネスや取り組みを伝えることができた。また各業種のビジネスだけでなく高校生へのメッセージも多く取り入れてくださり様々な生き方や考え方を多くの生徒に伝えることができたと感じた。

講座の実施に当たっては合同会議メンバーに「人つなぎ」をしていただいた。教員だけでは地域企業とのつながりが少なくよりよい講座展開が困難であったが、協力により迅速かつ効果的に講座の準備をすることができた。

Ⅳ環境・循環社会とバイオマス・SDGs 学習

この項目に該当する事業としてバイオマス学習や、SDGs を題材とした探究活動として以下の通り行った。

- ①真庭バイオマスツアーに参加し、バイオマスに関する幅広い知識について触れ、理解を深める。
- ②総合探究の時間を活用し、地域資源活用などについて他者と協働しながら五感を通じた体験活動を積み重ね、改善・解決策について考え、行動できる力を育成する。

本項目で目指す、文字資料に頼らない見て聞いて触れて習得する知識や経験は、生徒たちにとって有意義なものとなる。地域全体が学びの場となり、真庭市への郷土愛が育まれるとともに魅力の再発見や新発見にもなった。

Ⅴ異校種や地域住民等と連携した地域貢献活動

この項目に該当する事業として、校種を超えた交流学习や体験学習を以下の通り行った。

- ①地域住民会との農業交流や植栽交流、販売学習
- ②市が行う取り組みへの積極的な参加

この項目では、特に異年齢の方とのコミュニケーションを学ぶとともに、自己有用感を味わうことができた。販売活動については50%程度の生徒が肯定的評価を行っており、事前学習による知識の定着をより行い、自信を持って活動できるようにしたい。またコミュニケーションに課題を持つ生徒もおり、販売実習など地域の方と接する機会を繰り返し経験することで身につけてい

くと思われる。また初めての販売実習をする生徒については積極的に接客に行こうとする者もいれば、消極的な生徒もおり、こうした場の重要性を改めて感じたところである。

1.1 目標の進捗状況、成果、評価

事業計画に示した目標値の令和4年度末時点における進捗状況・成果・評価は次のとおりである。

◆真庭高校魅力化コンソーシアムに参加する団体及び個人 目標：20以上→55団体

令和4年度は、令和3年度に協力承認をいただいた35社に実際に高校へのバックアップをいただいた企業等20団体を加えた55団体となり、目標値を大きく上回り、目標値達成に向けて良好な取組みができたと考える。今後は、R6年度からの自走に向け、組織としての連携や運営の在り方が課題である。

◆生徒の聞き書き等に協力する高齢者の数 目標：5人/年→実績5人

「聞き書き」は真庭市郷育魅力化コーディネーターとの連携により実施した。様々な経験を重ねた先人たちはそれぞれ何らかの「思い」を持っており、依頼に対する反応は前向きであった。生徒自身にとっても、先人たちが歩んできた農業や経営等の歴史は、温故知新、今後同じ道を歩まないとしても大きな財産となるはずであり、カリキュラムとの整合を図りつつ継続させていきたい。

◆専門教科の中で地域に出て学ぶ機会の充実 目標：授業時間の1/6

この目標値は、高校の教育課程の中では達成は不可能であり、目標値の定量的な表現そのものの見直しが必要だと思われる。

コロナ禍の中で、地域に出て学ぶ機会を設定することも困難であったが、感染症対策を十分に行った上で、地域やこども園との植栽交流、真庭市の特産化を目指すフルーツパブリカ「ぱぷ丸」の普及活動、草花等の販売実習、ハーブガーデンでの学習会、銘建工業を中心としたバイオマスツアー参加、SDGsを題材とした探究活動などを実施することができた。

また、地域住民を対象とした校内外販売を実施し、地域との連携を深めるとともに、生徒の達成感や自己有用感の育成に努めた。

また、実際に地域へ出向くことに加え、都心の企業と真庭の企業5社が協働して新たな事業を立ち上げる場面に、アイデア創出の場面から新規事業のプレゼンまで生徒が参加するオープンイノベーション伴走型のインターンシップをオンラインで実施し、生徒10名が参加した。今後もオンラインを利用した、地域との連携を考えていきたい。

令和5年度は、生徒の希望を重視した学習展開と学習カリキュラムを調整しながら地域に出て学ぶ機会の充実と有効活用を図る。

◆小・中学校等と連携した事業の回数 目標：3回/年→実績6回

こども園との連携を3回、小学校との連携を3回実施できた。今後も異校種連携活動を充実させるため、真庭市郷育魅力化コーディネーターと連携して計画・実践を行う。今年度は、目標値達成ができた。次年度以降、さらに内容の充実を図る。

◆地域資源を生かした産業の創出に参画した件数 目標：1件/年→実績2件

JA 晴れの国岡山と連携し、地域の特産化を進めるフルーツパブリカ「ぱぷ丸」の栽培と普及活動に取り組んだ。高校で「ぱぷ丸」苗の生産を行い、地域の農家へ供給することができ、産業創出には至っていないが、農作物の地域の特産化に参画することができた。

また、真庭あぐりガーデンの主催する「真庭SDGs DAY」に参加し、ジビエを利用した「イノシメンチカツバーガー」の企画・販売を行った。

◆地域連携活動に取り組んでいる生徒の割合 目標 60%→実績 52%

食農生産科、経営ビジネス科の1年生を対象としたアンケート（12月）において、「学校の授業以外で地域連携活動に取り組んだ」と回答した生徒は52%であった。教育課程内での地域連携活動を合わせると目標値を達成していると考えられる。

- ◆これから先、どのように生きていきたいかを考えている生徒の割合 目標：80%以上→実績80%

食農生産科、経営ビジネス科の1年生を対象としたアンケート（12月）において、「高校卒業後の自分の生き方や働き方を考えることがある」の問いに対して80%の生徒が「考えることがある」と肯定的に答えており、自分の進路や生き方を模索していることがうかがわれる。

- ◆真庭市に誇りを持つという生徒の割合 目標：80%以上→実績85%

食農生産科、経営ビジネス科の1年生を対象としたアンケートにおいて、「真庭市に魅力を感じる」が81%、「地元で誇りを持っていると思う」が85%であった。

1.2 次年度以降の課題及び改善点

令和5年度は、事業指定最終年度である。新学科の生徒も2学年となり、専門教科の学びについて、さらに地域と結びついた内容を充実させていく計画である。あわせて自走を前提とした推進体制を構築する。令和4年度の取組から課題点をあげ、令和5年度の方角を示す。

1 カリキュラムに関する課題と方向性

- 本事業により農・商それぞれのカリキュラム充実に取り組んできたが、本カリキュラムの重要ポイントである「農・商のコラボレーション」までは描けていない。思い切った特色づくりを念頭に置き、令和5年度はこの具体的な内容と実施科目、地域連携先を確定する。
- アンケート結果の分析から、入学時の自己肯定感等が大変高い数値であったものが維持できず大きく下がっている。生徒の意見をくみ取り、それを反映させた学習内容構成を検討する必要がある。さらに、地域での活動をその後の学習活動に結び付けながら学習意欲や課題解決能力を育成し、自己肯定感を向上させる方法を検討・実施する。
- カリキュラムの背骨として、真庭高校の伝統である「TR」（真庭トライ&レポート＝総合的な探究の時間）を位置づけてきたが、普通科高校の中で作り上げられてきたシステムであるため、専門科ならではのシステムとして再構築する必要性が見えてきた。令和5年度はこれまで実施してきたTRを教科との関連性や地域との関係性を踏まえ見直すとともに、2年生以降の専門科目に結びつけることを検討し、令和6年度から実施する。

2 自走に向けた課題と方向性

- 校内内部の推進体制について、これまでマイスター・ハイスクール事業に該当する2学科に傾注した体制で取り組んできた結果、学校全体で生徒を育てるという理念に至れていなかった。特に教員数について、新学科完成年度である令和6年度までは専門科の教員数不足が明らかとなっており、令和5年度はコミュニティ・スクール化を含む全校的な校内推進体制を構築する。
- 管理機関を含む地域との連携については、これまでカリキュラム構築のための限定的な範囲にとどまっていた。令和4年度末に令和5年度以降の新・教育課程表のベースが出来上がったことから、令和5年度はいよいよ自走化を前提とした組織化に取り組む。自走化前提の組織化については校内推進体制とも連携を図っていく。
- 将来の真庭市を担う人材育成を進めるなかで小中学校と連携していく。この連携を進める中で、高校生にとっても自己有用感や達成感の醸成に繋ぐことができる。地域連携という点からみると、特に高校入学前である中学生や小学生との連携がスケジュール面等からうまく進んでいない。令和5年度は市内高校間の横連携と合わせ、市内小中学校(校長)との関係性構築に努め、小中学校の意見やニーズを聞きながら、一層の地域連携に努める。
- 令和6年度からの自走は地域関係者の共創が大前提である。特に大きな課題となるのが「財源」と「外部人材の効果的な起用」であるが、これについて令和5年度は新・教育

課程表を管理機関等と精査していく中で、相互の Win×Win の関係を描きながら、ヒト・モノ・カネあらゆる事項について継続支援のあり方を検討し、令和6年度以降の真庭市に立地する県立高校と地域をつなげる推進基盤を確立させる。